

# 北イタリアのサクロ・モンテ（聖山）巡礼

愛媛大学教育学部准教授

矢澤知行

## 1. はじめに

2009年12月6日（日）から13日（日）にかけて、「四国遍路と世界の巡礼」研究プロジェクトの一貫としてイタリア調査を実施した。調査者は、内田九州男教授、山川廣司教授、筆者の3名である。本稿では、同調査旅行の第5日目（12月10日）におこなった北イタリアのサクロ・モンテ巡礼地調査について紹介するとともに、この巡礼地の特質について、四国遍路やアジアのそれと比較しながら論じてみたい。

## 2. サクロ・モンテの概要

イタリア語で「聖なる山」を意味するサクロ・モンテ Sacro Monte（複数形 Sacri Monti）は、北イタリアのピエモンテ州からロンバルディア州にかけて分布するカトリック巡礼地群である。次に示す9件が、2003年、「ピエモンテとロンバルディアのサクリ・モンティ」として世界文化遺産に登録された（これらの配置については図1を参照。なお、括弧内はそれぞれの巡礼地の別称）。

- ①ヴァラッロ Varallo（新イエルサレム Nuova Gerusalemme）
- ②クレア Crea（サンタ・マリア・アッスンタ S.Maria Assunta）
- ③オルタ Orta（サン・フランチェスコ San Francesco）
- ④ヴァレーゼ Varese（ロザーリオ Rosario）
- ⑤オローパ Oropa（ベアータ・ヴェルジネ Beata Vergine）
- ⑥オッスッチョ Ossuccio（ベアータ・ヴェルジネ・デル・ソッコルソ Beata Vergine del Soccorso）
- ⑦ギッファ Ghiffa（サンティッシマ・トリニタ SS.Trinit?）
- ⑧ドモドッソラ Domodossola（カルヴァリオ Calvario）
- ⑨ヴァルベルガ Valperga（Belmonte ベルモンテ）

これらサクロ・モンテは、15世紀末以降、イエルサレム巡礼の「代替聖地」として造営されたものといわれる。その歴史的背景として次の二点が挙げられる。まず、オスマン・トルコの勢力拡大によってイエルサレムへの巡礼が困難になったこと。アナトリア（小アジア）から興ったトルコ系のオスマン朝は、1453年にビザンツ帝国（東ローマ帝国）の首都コンスタンティノープルを占領し、その後もイエルサレムを含む東地中海世界から西地中海方面へと勢力を伸ばしつつあった。そうした中、イエルサレムに代わる巡礼地が求められるようになったのである。もう一点は、アルプス以北で宗教改



図1 北イタリアにおけるサクロ・モンテの分布

革運動が活発化したこと。16世紀初頭から、ドイツではルターが、スイスではツヴィングリ、カルヴァンが相次いでキリスト教の改革運動を開始し、都市民や農民の支持を集めるようになると、これに対してカトリック勢力の巻き返しが行われた。このいわゆる「反宗教改革」の動きの中で、カトリックの修道士らによって、信者を引きつける新たな聖地として、あるいは巡礼者の受け皿としてのサクロ・モンテが北イタリアに次々と造営されたのである。

さて、今回の調査で訪問したのは、前掲リスト中の①ヴァラッロと⑤オローパの二ヶ所である。前者は初期のサクロ・モンテとして、後者はマリア信仰のサクロ・モンテとしてそれぞれよく知られている。以下、これらの巡礼地に関する現地調査の内容を紹介していきたい。

なお、今回の調査では、二ヶ所の巡礼地それぞれについて現地ガイドに解説を依頼し、学術的な内容も含めた貴重な情報を得ることができた。ただ、調査者の訪れた時期が巡礼の季節から外れていたため、実際に巡礼者が集って行動する様子を観察する機会は少なかった。そこで、本稿では、調査者が訪れた時点での巡礼地の概況と、各巡礼地の沿革などを中心に述べていこうと思う。

### 3. ヴアラッロのサクロ・モンテ Sacro Monte di Varallo

調査日（12月10日）の午前中、ヴァラッロのサクロ・モンテを訪問した。ヴァラッロは、ミラノの北西約100km、イタリア・アルプスの山麓に位置する落ち着いた佇まいの町である。この町の背後に聳える岩山の上にサクロ・モンテはある。町とサクロ・モンテの間の標高差は200mほどで、現在はロープウェイで結ばれていて、片道約3分間で行き来することができる。

ヴァラッロのサクロ・モンテを創建したのは、ベルナルディーノ・カイミ Bernardino Caimi というフランチェスコ会修道士である。1478年にイェルサレム巡礼を経験したカイミは、ヴァラッロに帰還後、聖地の様子を再現した新たな巡礼地の造営を始めた。そして最終的には、町の教会（サンタ・マリア・デッレ・グラッツィエ教会）とサクロ・モンテを結ぶ巡礼路も整えられた。イエスの生涯をモチーフとした45の礼拝堂をめぐりながら山頂に達するというものである。今回は、時間的制約もあって、徒歩でその巡礼路を辿る余裕はなく、ロープウェイで直接山頂に赴いた。

サクロ・モンテに上ると、ヴァラッロの町とそこを流れるセージア川を眼下に見渡すことができる（写真1）。山上には、清冽な泉の湧く中庭を囲むようにして、教会や礼拝堂などの巡礼施設が配置されている（写真2）。

まず、その一つが、聖墳墓教会を模した洞窟風の礼拝堂である。その狭い入り口の脇には、創建者カイミの髑髏が飾られており、身を屈めて礼拝堂の中に入ると幾つかの小部屋があって、横臥したイエスの亡骸の像を間近で拝むことができる。このほか「最後の晚餐」の場面を模した彫像群（写真3）などもある。なかでも注目すべきは、イエスの磔刑のシーンを再現したディオラマ（写真4）である。これは1517年から約20年かけてガウデンツィオ・フェッラーリ Gaudenzio Ferrari という芸術家が制作したもので、小ホールの中



写真1



写真2

に、十字架上のイエスを取り巻くようにして実物大のリアルな彫像が並んでいる。彫像はテラコッタ製で、頭髪などは本物が使われているという。ホールの壁面にはフレスコ画の背景が描かれており、独特の臨場感を醸し出している。

ヴァラッロのサクロ・モンテは、その宗教的価値もさることながら、美術的にも高い評価を受け、美しい自然環境にも恵まれた聖地として、多くの巡礼者を集めてきたのである。



写真3



写真4

#### 4. オローパのサクロ・モンテ Sacro Monte di Oropa

同日午後、ヴァラッロから移動し、もう一つの目的地であるオローパのサクロ・モンテを訪れた。このサクロ・モンテは、ピエラ Biella の街の北西約13kmの山岳地帯に位置している。標高は約1,200m、周囲三方をトーゴ山などの峰々に囲まれているが、南方が下界に向けて開かれているため、高原上にいるような開放感がある。調査者が訪れた時には、辺り一面雪が薄く積もっていた。

なだらかな傾斜のあるその山上の空間には、壮麗な建築群が配置されている（写真5）。屋内には、有力者に寄進された美術品コレクションや建築物の設計図などを展示するスペース、かつて当地のスポンサーで



写真5

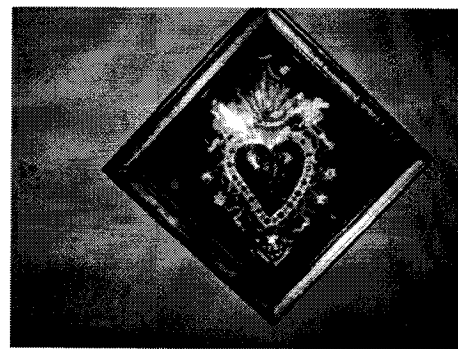


写真6

あったサヴォイア家の人々のための貴賓室、宗教関係を中心に様々な書物を蔵する図書室などがある。なかでもとくに我々の目を引いたのは、廊下や階段の壁面に所狭しと飾られている巡礼者からの奉納物の数々である。額に収められたハート型の装飾品（写真6）や杖などが多く見受けられる。これらの奉納物は、心の病を抱え、あるいは杖をついていた巡礼者が、祈願の結果治癒し、その「お礼参り」をおこなった際に奉納したものであろう。

こうした信仰の背景にあるのが、オローパのサクロ・モンテを特徴づける「黒いマリア」である。伝説によれば、4世紀末、ベルチェリ Vercelli の司教エウゼビオ Sant'Eusebio が、聖ルカの彫ったマリア像をエルサレムから持ち帰ってこの地に祀ったという。その後、一部の修道士がこの地に滞在して祈りを捧げていたが、8～9世紀に最初の教会が建てられ、13世紀以降たびたび増築されていくなかで、オローパは「黒いマリア」信仰の聖地として多くの巡礼者を集めるようになったという。そして17世紀以降、フィリポ・ユヴァーラ Filippo Juvarra ら著名な建築家たちによって現在のような宗教建築群が設けられ、また、周囲の丘にもマリアの生涯を辿ることのできる12の礼拝堂が建設されて、巡礼地としてのかたちが整えられた。なお、

「黒いマリア」の像は、聖堂内部にある初期教会の遺構の中に安置されており（写真7）、現存するマリア像は、13世紀の彫刻家の手によるロマネスク様式のもので、黒い彩色は当時の手法だという。調査者たちが訪れた時、十数名の巡礼者が、このマリア像の前で夕刻のミサを終えたばかりで、信仰が今も息づいているのを肌で感じる事ができた。かつての巡礼者は、この地を訪れて九日間の儀式を行ったといい、敷地内には現在も巡礼者のための宿泊施設が用意されている。ミサを終えた巡礼者たちは薄暮の中、その宿舎へと戻っていくところであった。

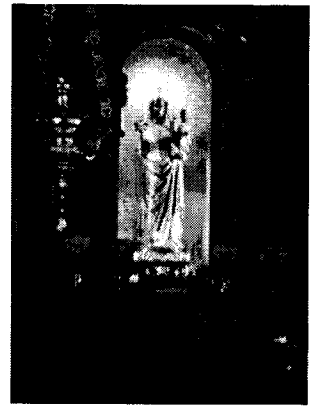


写真7

## 5. おわりに

最後に、サクロ・モンテの巡礼地としての特質について、四国遍路やアジアの巡礼地との比較の視点も織り交ぜながら簡単に論じておきたい。

まず、サクロ・モンテの特質として、聖地をいわば「複写」したものであるという点が挙げられよう。とくにイエルサレムを模したといわれるヴァラッロのサクロ・モンテは、遠方の聖地を身近な場所に再現したものといえる。たとえば小豆島の「写し霊場」と類似の性質を持つとあってよいだろう。

次に、「追体験」型の巡礼地としての性格を挙げることができる。ヴァラッロは創始者カイミ自身の聖地巡礼の体験に基づいて造営されたものであり、ここを訪れた巡礼者たちは、カイミの巡礼をいわば「追体験」することができる。同時に、ヴァラッロはイエスの生涯を、オローパはマリアの生涯をそれぞれ再現するというコンセプトを持っていたから、巡礼者たちは肉眼を通じてイエスやマリアの人生を確認し、そこに宗教的感動を味わうことができた。必ずしも文字を読むことのできなかつた、かつての巡礼者たちにとって、こうした舞台装置はとて有意義なものであったにちがいない。

さらに、サクロ・モンテの「聖山」としての特質も考察に値する。ヴァラッロのサクロ・モンテは、生活圏のすぐそばに位置しており、町の人々にとっても遠方から訪れた巡礼者たちにとっても、比較的身近な存在の聖山だったといえよう。四国遍路の札所の中では第84番の屋島寺や第85番の八栗寺のような位置づけといえようか。一方のオローパは、雪を頂く峰々に囲まれた山上の世界にある。かといって人界から隔離した場所にあるわけではない。あえて四国遍路の札所に例えれば、第66番札所の雲辺寺のような存在といえるだろうか。ひとくちに聖山（サクロ・モンテ）といっても、生活圏からの距離という観点に立てば、多様な姿が立ち現れてくるのである。

もう一点、在地の信仰との関係についても触れておきたい。今回訪れたオローパは、すでに13世紀にはマリア信仰の聖地として巡礼者を集めていたという。つまり、サクロ・モンテには、イエルサレムの代替巡礼地としての性格だけでなく、それ以前から脈々と受け継がれる在地の民衆信仰の系譜を見出せるケースもあるのだ。筆者が2008年12月に調査を行った中国・山東省の泰山でも似たような事例を観察することができた。泰山は、太古より皇帝祭祀の行われてきた聖地として知られるが、一方では碧霞元君のような民衆信仰の女神も祀られ、多くの庶民の巡礼者を集めつつ現在に至っている（同調査については「中国山東省泰山調査報告」『四国遍路と世界の巡礼 その歴史的諸相の解明と国際比較活動紹介』pp.10-15を参照）。オローパや泰山に見られるこうした宗教的な重層構造について、歴史的背景を踏まえながらさらに精査すれば、より興味深い結果が得られるかもしれない。今後の課題としたい。

